

# 赤井川村 風力発電を考える会通信

## 第12号 2025年12月10日

<https://akaigawawind.wixsite.com./index/>

### メガソーラー

## 国、道が規制強化へ

釧路湿原周辺に乱立するメガソーラー 北海道新聞から



大規模太陽光発電所（メガソーラー）の建設をめぐり、国と道がようやく規制強化に乗り出しました。メガソーラーは温暖化対策の切り札のように扱われてきましたが、あちこちで森林伐採や生態系、景観への悪影響が地域の深刻な問題になっています。風力発電も環境破壊という点で同様の批判が強く、風力も含めて再エネの規制を総点検することが求められています。

### 風力発電にも歯止めを

規制強化のきっかけは釧路湿原周辺でメガソーラーの乱立が続く中、釧路市北斗で建設計画を進める日本エコロジー（大阪市）の相次ぐ法令違反が全国的に注目を集めたことでした。

こうした状況を受け、国はメガソーラーの建設にかかわる法律の改正作業を進めています。例えば、電気事業法の申請手続きや農地法の転用許可などを厳

しくするほか、環境省は釧路湿原国立公園を拡張し、建設禁止区域を広げることを検討しています。

道は鈴木直道知事が事業者向けのメッセージとして、三原則を打ち出しました。①関係法令の順守は絶対②法令違反には厳正に対処③地域との共生が大前提—というものです。日本エコロジーの事業に対しては「極め

て遺憾」と指摘しています。地元自治体も手をこまぬいているわけではなく、釧路市では出力十キロワット以上の太陽光発電所の建設を規制する条例を制定しました。しかし、条例では事業を中止に追い込むことまでは難しいのが実態です。しかも、すでに建設工事が始まってしまった事業にまで適用することはできません。

地方自治体が条例による規制を考えるうえで大事なことは、問題が起きてからではなく、問題が起きる前に予防的措置として条例制定を考えることです。

風力発電の建設現場。作業道を作るために森林が数十ヘクタールも伐採される





# 再エネは自然に優しいですか

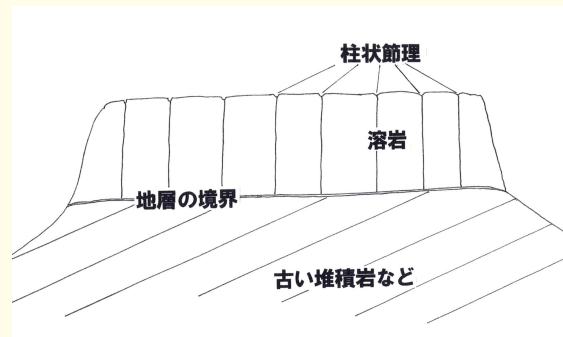
## 地学から見た 風力発電・太陽光発電

太陽光発電が計画されるのは山の稜線、とりわけ緩やかな幅のある稜線が狙われやすい。かまぼこ形の地形で、上の方は緩やかだけど、両側はすといんと落ちている、そんなところに造られるんですね。ですが、地学的に見ると、脆弱で危険なところが多いです。一番怖いのは土砂災害です。崖崩れ、地滑り、岩屑なだれ、山体崩壊、土石流などがあります。このうち崖崩れは幅数メートルから十メートルくら

いですが、崩れ落ちる速度が速い。地滑りはもっと規模が大きくて速度は遅い。早くて数時間。数日かけて動くのが普通です。

**水と粘土で滑る地層**

これらは地震や集中豪雨、火山活動などをきっかけに起こるわけですが、発生過程をたどてみると、大体、雨や氷が最初です。水が地下に浸透して、地下に亀裂をつくります。すると、その亀裂が水



キャップロック構造

下位との境界に粘土ができません。そこから地滑りが発生しやすくなります。

地層と傾斜の関わりを見てみましょう。地層が一方に傾いているとすると、傾いてい



角館 正勝氏  
遠軽風力発電を考える会代表

沼田町出身。島根大学理学部地質学科卒。同大学修士課程にて地質学専攻。修了後、道内で高校教員を務める。2023年4月定年退職。遠軽町在住。

## 風車の地盤は脆弱で危険

赤井川村と余市町の風力発電を考える会は10月5日、連携学習会を余市町中央公民館で開きました＝下写真＝。4回目となる今回は「再エネは自然に優しいですか」をテーマに、角館正勝氏が地学から見た再エネの問題点、佐々木邦夫氏が多発するバードストライク問題について解説しました。両氏の講演の要旨を紹介します。



## 累積的な影響評価が必要



佐々木 邦夫氏  
北海道風力発電問題ネットワーク代表

風力発電による環境破壊の調査を続け、講演などを通じて市民活動の支援に取り組んでいる。一般社団法人北海道自然保護協会常務理事。石狩市在住。

## 風力発電が自然に与える影響 バードストライク編

オジロワシは両翼を広げると二メートルくらいある大きな鳥です。天然記念物で、絶滅危惧種でもあります。オオワシも天然記念物です。幌延町にある浜里ウインドファームでは、このオジロワシとオオワシが風車にぶつかると、いわゆるバードストライクが起きている。

十四基の風車が立っているところを除いて、周りにはぐると利尻礼文サロベツ国立公園です。渡りの時期には、

海の向こうのサハリンまでさまざまな鳥が飛んでいきます。

**「二十年間で数羽」は嘘**

バードストライクを心配して、運転前に事業者に聞いたところ「二十年間で数羽しか確率的に起きないから大丈夫」と話していました。ところが、二〇二三年五月に営業運転が始まってから、わずかな一年九カ月の間にオジロワシが九羽、オオワシが一羽、ハードストライクで死んでし



風車にぶつかって真っ二つになった鳥

まいりました。

あまりにも事故が多いというので、事業者はいったん風車の運転を停止するとともに、バードストライク対策システムというのを付けました。こ

れは風車に近づく鳥をカメラで検知し、スピーカーからピーピーという特殊な音を出す仕組みです。今年七月に運転を再開したんですが、八月初めには今度はハイタカが風車にぶつかりました。対策システムは意味がありませんでした。

ハイタカは天然記念物ではありません。絶滅危惧種でもなく、準絶滅危惧種なんです。だから、事業者は「直ちに稼働を停止することは考えていない」と。法的には準絶

を含み、地下の水位が上がる。とともに、化学反応で粘土がつくれます。その結果、水と粘土で滑りやすい面ができ、その上に乗っかっている部分が重量に耐えきれずに滑り落ちるというわけです。

こうして地滑りを起こしやすい地質構造をキャップロック構造と言います。道内で風力発電が計画されている場所はほとんどがこの地質構造です。上位は溶岩が急激に冷やされた柱状節理になっていて、その裂け目から水が浸透し、

る方に地層は滑り落ちやすくなります。地層と地層の境目が断層だったら、もつと滑りやすいです。それでは、もう一方の側は大丈夫でしょうか。こちらは滑り落ちない代わりに急傾斜になり、崖崩れが起きやすくなります。これでは、どちらがいいとも言えません。

### 保水力失い河川氾濫

ほかにも風力発電については、河川の氾濫につながる危険があります。山の稜線の植物を剥がしてしまえば、保水力が失われ、雨水がそのまま河川に流れ込んでいきます。川の水量が二倍になると、押し流されるものの大きさは六十四倍になるそうです。洪水になれば、家も簡単に流されてしまうわけです。

太陽光発電に関して言えば、地滑りのあとの緩やかな場所にパネルを並べたいというところもあるようです。ですが、そういうところは軟弱地盤です。大雨が降ったらどうなるでしょうか。水のたまるような場所、例えば湿原のようなところだと設備が水に浸れば感電の危険があります。パネルは割れても日光が当たれば発電するので、なにか被害がでないか心配になります。

滅絶危惧種の事故は環境省への届け出義務がありません。ですが、これもしっかりと届け出す制度が必要だと思います。

### 抜け道が多い関係法

こうした例を含め、関係する法律にはとくに抜け道が多い。風力発電事業は環境影響評価法に従って手続きが進みますが、角館さんのお話にあったような地質の問題は影響評価の対象に入っていない。文化財保護法にしても、例えば、私がオオワシを捕まえたら逮捕されます。でも、風車にぶつかって死んでも事業者には何のお咎めもありません。日弁連の公害対策・環境保全委員会の方と意見交換をしてみましたが、未必の故意とか、事故とか、そんな理屈が付いて、訴えるのも難しいだろうという話でした。

モニタリング制度がないのも問題だと考えています。風力発電事業を二十年間行つたとしたら、その間、バードストライクはどうだったのか。モニタリングしたデータを集積し、研究する。そして、風力発電事業をやっている隣で同じ事業をやったらどういう影響が出るのか、そうした累積的な影響評価が不可欠です。



## 藤門議員が一般質問

9月定例村議会

藤門弘議員は9月定例村議会で、一般質問に立ちました。北海道電力泊原発（泊村）3号機の再稼働について、「原発は放射能災害の危険性がある」などとして反対の立場を表明するとともに、馬場希村長の考えを質しました。

### 今なお反対を堅持か

私は基本的に原子力発電電そのものに反対の立場に立ちます。反対の理由は数々ありますが、大きく①放射能災害の危険性が

れているところです。

以上の立場から、私は泊原発3号機の再稼働に強く反対するものですが、この意思是馬場村長におかれても共有されているのではないかと考えます。なぜ

# 「泊原発再稼働に反対する」

あること②放射性廃棄物を発生させること、この2点をあげたいと思います。福島の大事故の反省からエネルギー政策を転換させたにもかかわらず、国の新しい「エネルギー計画」では「原発を最大限利用する」とし、これにもとづいて停止中の原発の再稼働を進めようとしています。北電は「原子力規制委員会」に再稼働審査を求めています。泊原発は「審査書」が発表されましたが、本年7月末にこれを承認する「審査書」が発表されました。海底活断層の過小評価や地核変動への科学的知見を踏まえないこの承認は強く批判さ

### なぜ同意範囲求めぬ

泊原発に関しては北海道電力と地元自治体との間にふたつの安全協定があります。今回の3



※北海道新聞から

立場を堅持しておられるかどうかお訊ねします。

方針に私はまったく同意できません。福島島の事故で明らかのように、原発事故の被害範囲は広大であり、UPZ30キロ圏全体が被災することとは間違いありません。原発から20数キロの距離にあるわが赤井川村が再稼働同意に関する権利を持つことはまったく不明であります。

しかるに、本年7月29日の北海道新聞アンケートで、馬場村長は「同意は4町村でいいが、UPZ内自治体の意見は聞くべき」という、微妙な回答をされています。他町村の回答にもかなりブレがありますが、なぜ赤井川村長が同意範囲の拡大を求めなかったのか、大変不思議に感じております。この件についての村長の見解をお伺いします。

### 馬場村長の答弁

基本的に原発の安全性について懸念を持っていて、出来れば原発は近くに存在してほしくないという点については今も変わりありません。当

質問に立つ藤門弘議員

号機再稼働承認に関連して政府は地元4町村の同意を求め、と発表しており、その手続きに入ろうとしています。同意の範囲を4町村に限るこの

